

移住女性による主体的な〈多文化〉の表象 —— ソウル国際女性映画祭の試み

徐 阿 貴 (大阪経済法科大学
アジア太平洋研究センター)

はじめに

韓国社会は周辺のアジア諸国出身の移住労働者や結婚移住者、留学生等、移民の増加により、急速な「多様化」を経験している。外国人登録者数は約150万人、人口の約3%を占め、同質で単一の民族からなる社会という観念は変更を余儀なくされている。2012年の外国人登録統計では、就労者は約60万人、結婚移住者と在外同胞はそれぞれ約14万人となっている（韓国安全行政部、2013年）。

移民は、韓国の労働市場、および結婚市場の不足分を補う貴重な「人材」である。ただし2000年代なかば以降韓国政府が推進する移民の社会統合政策は、移民人口の中では少数派に属する結婚移住者を対象とするものである。その多くは、農漁村の韓国人男性と結婚したフィリピン、ベトナム、中国、日本、モンゴル、タイ、カンボジア、ウズベキスタン等を出身とする女性である。低出産という問題を抱える韓国は、将来の韓国民の再生産に関わる結婚移住女性の社会統合を重視する。社会統合の枠組みとして採用されたのが、これまでおもに西欧で展開されてきた多文化主義であった。韓国政府は多文化主義をあらたな社会的ビジョンとして宣言し、2008年には結婚移住者とその子どもたちに広範な社会サービスを提供することをうたった多文化家族支援法が制定された。

しかし韓国の多文化主義政策は、受益者を自国民との法的婚姻関係にある結婚移住者とその子どもに制限し、他のカテゴリーの移民には排除的に作用するものである。プログラムの多くは、結婚移住者が韓国語や文化を習得するプログラムや、出産や育児を軸とする「標準的」な女性のライフサイクルに沿った教育プログラム

である。もともと韓国に住む人々支援団体は「先住民」と表現する一が移住者の出身言語や文化を学ぶプログラムは少ない。相互性を欠いた、結婚移住女性に対するホスト社会の言語文化の一方的な習得の強制は、多文化主義という名の同化主義にすぎないと批判されている（たとえば、金賢美、2008「誰のための統合なのか 韓国における結婚移民女性政策と家父長的発想」『女性の人権の視点から見る国際結婚』現代人文社）。

結婚移住女性は、韓国社会の多文化・多民族化の担い手としてマジョリティから過剰に期待され、テレビや映画、インターネットなどのマスメディアはこれを忠実に再現する。メディアで描かれるマイノリティはステレオタイプ化され、偏見に満ちた形で表象されやすい。とくに結婚移住女性は、「普通の韓国人」と異なる外見や風習が強調されたり、あるいは彼女たちがいかに韓国語や韓国文化にうまく適応しているかが賞賛される傾向がある。とくに、「伝統的」な母、妻、嫁として家庭生活を営んでいることが強調される。それは、現代の韓国女性にはもはや期待できない女性らしさの概念やジェンダー役割が、移住女性に投影されたものといえよう。

メディアを通じて流布する大量の結婚移住女性に関する表象は、マジョリティによる彼女たちに対する考えや態度、感情、行動に影響を与える。結婚移住女性も、メディアの表象を内面化し、マジョリティの期待に沿った態度や行動をとることで、表象は「現実」となり増幅される。移民全体の中ではマイノリティに属する結婚移住女性が、これほど注目されるのはなぜか。それは、結婚移住女性が「初の定住型移民」であるという以上に、結婚という制度を通じて、そして出産によって、単一の韓国人という概念—それ自体、近代以降の朝鮮半島の政治

的状況の産物だが一を根底から揺るがす存在だからである。

こうした状況に対し、移民たちが中心となって、韓国における移民を主人公にした映画やミュージカル等が近年制作されている。移民による主体的な表象は、主流のメディアによる文化的表象と、現実の間の乖離を埋めようとする当事者による挑戦として注目に値する。本稿ではソウル国際女性映画祭による「多文化メディア・アカデミー」に注目し、移住女性による〈多文化〉に関する表象について考察する。以下では、まず韓国の大手メディアにおける結婚移住女性の表象の特徴を述べる。そのうえで、ソウル国際女性映画祭における「多文化メディア・アカデミー」の実践と、制作作品について検討する。最後に、「女性」と「映画」の交差において形成されるフェミニスト的な空間に移住女性が参加することの、韓国の多文化主義への示唆を述べる。

1. メディアに描かれる結婚移住女性

テレビのニュースやドラマ、バラエティ番組、ドキュメンタリー、映画など、韓国のメディアには結婚移住女性が頻繁に登場し、韓国社会における結婚移住女性への関心の高さがうかがえる。たとえば、伝統的な家族関係の中で家事育児介護を一手に引き受ける働き者、一生懸命がんばる姿、過疎化にあえぐ地域社会の救世主、売買婚の犠牲者、そしてお金目当ての偽装結婚などとして取り上げられる。

チョ・ムニ他は、韓国統合ニュース・データベース・システム（韓国言論振興財団が運営する記事検索サイト）を用い、メディアが結婚移住女性を描く際にどのようなフレームを用いるかを検討した。結婚移住者支援策の急速な展開を見た2000年代後半の記事を分析したところ、韓国のメディアでは「統合」および「被害者」というフレームが特徴的であると結論づけている。

統合フレームは、結婚移住女性の社会統合を促進するような示唆や支援、提案に焦点をあて、政府や自治体等による韓国語や韓国文化、生活適応に役立つヒントといった教育プログラムが紹介される。たとえばキムチの作り方を習

いながら女性間の先輩＝後輩という関係をつくったり、結婚移住女性の出身地域の文化を紹介するといった内容である。

「統合」に次ぐ被害者フレームでは、虐待、犯罪、残虐、差別、離婚、精神的・身体的障碍、自殺、窃盗といった、結婚移住女性を無力化させるようなキーワードやフレーズが使われている。たとえば、不本意な結婚、結婚した先が過疎地であったこと、夫や姑からの虐待などだが、問題は、女性たちを自分で解決する能力が欠如した者として描いていることである。被害者フレームでは、韓国社会における弱者として、不当な扱いを受け服従を強いられる者として結婚移住女性を表象する。ただし被害者フレームは、摩擦や人間的関心、経済、モラル、責任等のフレームの中で年々順位が下がっている。それは結婚移住女性に対する「犠牲者」「異邦人」という見方を脱却し、「隣人」「家族」として描くことで、ベクトルが「統合」にシフトしたためと解釈している。婚姻件数の1割を国際結婚が占める現状を反映し、メディアは結婚移住女性の社会統合に向けた解決策や提案、先進的な取り組みを示すことで、生産的で肯定的なメッセージを打ち出そうとする（CHO Moonhee, LEE Jaejin, and IM Jinsook, 2012, "Media Frames and Ethnic Minority Women in Korea: Expanding a Generic Frame in Minority Studies", *Asian Journal of Women's Studies*, 18-4）。

次に、メディア表象の具体例として「ラブ人（イン）アジア」という、KBS（韓国の公営放送）による、韓国人と結婚した外国人女性たちの結婚生活を紹介する番組を見てみよう。番組では韓国各地に住むさまざまな地域を出身とする結婚移住女性（結婚移住男性の出演はまれ）一家を毎回一組取り上げ、異国生活の苦労、困難の克服、家族や地域社会への適応、幸せな家庭、望郷の念などが描かれる。韓国料理の腕前、夫方の両親に対して韓国語の尊敬語を正しく運用する能力はオーバーに褒め称えられる。外国人妻の故郷訪問の場面では、親子の涙の再会、韓国で生まれ育った子どもが母の故郷でどのような行動をとるか、夫と妻の両親や地域の人々とのあたたかな交流が、外国の珍しい景色や生活様式、食べ物などの紹介とともに、定式的に描

かれる。

番組では、韓国生活における文化的、人種的な葛藤や日々の労働などが美化され、移住女性たちの問題の直視が回避される。一方、移住女性たちを賢明な「妻」として、親孝行の「孝婦」として描き、夫家族、地域に溶け込みたくましく生きる姿を強調、アジア出身の女性が韓国入女性への代わりとして韓国の家族や社会を守る女性と示唆する。結果として、彼女たちが経験する差別や困難を当然視し、納得するような風潮を作り出している。このように、移住女性はホスト社会からの期待に沿うように表象されがちである（安貞美『メディアにおける移住女性の表象 韓国・フィリピンを中心に』（博士論文）2011年）。

主流メディアは移住女性を客体化し、商品化し、消費する。そうした中、移住女性の団体がメディアに介入する例も現れている。「ラブ人（イン）アジア」に出演した結婚移住女性たちの組織であるムルパンウルナヌメは、当事者としての立場から、自立した現実味のある移住女性の姿をなるべく取り上げるよう制作側に求めてきた。視聴率優先のもとマジョリティの同情心を刺激する内容が主流だが、それが「善意」からだとしても、視聴者が移住女性を助ける対象とみるよう方向づけることで、むしろ当事者にとってマイナスに作用すると訴えてきた（2013年12月30日、ムルパンウルナヌメ会長インタビュー）。

また、映画『マイラティマ』（ユ・ジテ監督、2013年）は、ベトナム出身の結婚移住女性と、失業中の韓国人男性の物語である。夫の家族から搾取・虐待されていた女性の前に、救世主のように若者が現われ、地方からソウルへ逃避する。自由な生活を始めたふたりは、不法滞在、失業という過酷な現実打ちひしがれる。生活費を稼ごうにも、女性は入国管理局の摘発と人身売買ビジネスの危険に遭う。男性もホームレスであるためまともな仕事に就くことができない。そのうちに女性は妊娠するが、真実をあかさず男性の前から姿を消す。

監督は映画制作に際し、移住女性の人権団体に意見を求めたり、結婚移住女性の手記を読むことで、結婚移住女性にとっての「現実」を描き出そうとした（韓国移住女性人権センターの

ニュースレター、2013年7月）。韓国人夫の利害を優先し外国人妻の人権侵害を増長する入管制度、困窮する移住女性を食い物にする性ビジネスがそれである。ホスト社会の男性が弱い立場にある外国人女性を救おうと葛藤するストーリーは、結局のところ男性的なファンタジーにすぎない（ある結婚移住女性へのインタビューから。2013年11月20日）。たしかに映画の中の女性は、男性に依存した無力な存在に見える。しかし映画が進行するにつれて、故郷の母を思う彼女の内面が徐々に露わになり、過酷な状況の中でも自身で選択を行い、主体的に力強く生きようとする姿が際立っていく。

2. ソウル国際女性映画祭 多文化メディア・アカデミー

メディアによる移住女性の表象は、たしかに移住女性が直面するある現実を写し出している。しかし、移住女性の一面を自在に切り取り評価するまなざしは、マジョリティの優位性を強化し、ステレオタイプを増長してしまう。そうした中、移住女性自身による主体的な表象の試みがある。

ソウル国際女性映画祭（International Women's Film Festival in Seoul, IWFFIS）は1997年、女性の視線で女性の現実を捉える映画の紹介を目的として始まった。なぜ「女性」映画祭が必要なのか。大部分の映画は男性によって制作される。映画で描かれる女性は、男性が望む女性の表象である。女性の観客は、男性がつくりだす分裂し歪曲された女性像を見ることが、自身のアイデンティティを揺さぶられる。ゆえに、男性中心的主流映画産業、映画文化を批判的に再考し、これに対抗しうる、女性による、女性のための、女性についての映画の祝祭が必要と考えられた。IWFFISはアジアを代表する世界最大の国際女性映画祭であり、アジアと世界をつなぐ女性映画人ネットワークの中心となってきた。IWFFISアジア短編映画コンペは、アジアで活動する女性監督の登竜門であり、ドキュメンタリーと劇映画部門に携わる韓国の女性監督を支援してきた（キム・ヨンミ「女性と映画が交差する〈場〉」—ソウル国際女性映画祭」『女たちの21世紀』第76号、2013年）。

IWFFISは、主流の映画産業では捉えられることの少ない、女性の経験や欲望を表現する映画を取り上げてきた。そして作品をただ上映するのではなく、観客と製作者の間の活発な議論を重視してきた。映画祭そのものが、映画というメディアを通じ、ジェンダーの政治に対応するあらたな女性の主体を創りだすフェミニスト的实践の場なのである。過去16年間IWFFISは女性映画の紹介を通じ、「現実 (real)」と「映画 (reel)」の両方で女性の欠落を埋める社会運動を行ってきた。IWFFISの文化政治的目的とは、女性の経験を公的領域と連結し、女性が活動する公共空間を拡大、変革し、可能性を拡げること、すなわち対抗的な公共圏を確保することである（クォン・ウンスン「女性映画祭の文化政治を再調停すること—ソウル国際女性映画祭国際シンポジウム」『女性映画祭の新たな地図を描く—産業、制作、ネットワーク』2013年）。

IWFFISは、映画を通じて女性の現実をイシュー化し、女性の現状を変革しようとする企てである。討論では、女性監督が再現した女性の経験はどの程度政治的といえるか、あらたな体験にどのような言葉を与え意味づけるのか、映画を通じてどのような女性主体が創りだされるか、といったことが議論される。そこで問題化されるのは、IWFFISを通じて追求される「女性」とは、いったい誰のことかという根本的な問題である。これに関しIWFFISは、女性や障害者、LGBTなどマイノリティをテーマとする映画上映と討論の場をつくり、当事者とフェミニスト運動をつなげる努力をしてくている。

ビデオ・アクティビズムによる教育プログラム「多文化メディア・アカデミー」は、IWFFISにおける、女性のアイデンティティをめぐる問題意識から生まれた試みである。このプログラムは、韓国文化芸術教育振興院の支援により、移住女性が直接語る映像ストーリーを制作する「移住女性メディア・ワークショップ」として2006年に始まった。日常生活における人種とジェンダーをめぐる文化政治を、フェミニストの視点で切り込み、ビデオを通じて表現することを特徴とする。ビデオというメディアは、低コストかつ手軽に操作可能であるため、アマチュアの映像制作への参加を拡大した。ビデオ・アクティビズムは、主流のメディアでは無視され

てきた女性の声を表現する手段として近年発展している。

プログラムの目的は第一に、人種や言語、文化、経済的な意味で劣位に置かれるマイノリティ女性を「移民」として見るだけでなく、現代フェミニズムの課題として再考することである。第2に、移住女性が映画制作によって、文化を作りだす行為主体として韓国文化に介入する機会を獲得することである。第3に、メディア教育が移住女性にとりフラストレーション発散となると同時に、さまざまな抑圧に直面した際に有効なコミュニケーション方法を習得するという期待が込められる（第10回ソウル国際女性映画祭プログラム）。このプログラムには、「先住民」女性と移住女性との間に、韓国社会における家父長制とともに闘うパートナーとして連帯が形成されることへの希望が込められている。

2011年より、短編映画制作コースと人文学講義の2本立てとなり、また結婚移住女性だけではなく、海外生まれの韓国系移民、海外養子、国際結婚した韓国人男性、多文化に関心を持つ韓国人女性などに門戸を広げ、名称を「多文化ビデオ・アカデミー」に変更した。人文学講義を担当するのは、養子縁組の当事者、「混血」者や結婚移住女性の人権向上に取り組む活動家、女性学専攻の大学教授などである。人文学講義の導入により、フェミニストの視点に立ちつつ韓国社会の「多文化」を批判的に検討するビデオ・アクティビズムとしての特徴が強められた。作品は制作翌年のソウル国際女性映画祭で一般公開される。その内容は、制作者の体験を扱いつつも、個人のストーリーを越えて、境界上に生きる当事者による現代韓国社会に対する根本的な問題提起となっている。

多文化主義は移民に対しホスト社会への適応を要求するが、文化的多様性に関する問題は移民に限定されるものではなく、ホスト社会の側にも積極的な理解と努力を要請している。よって制作作品は、言語文化、民族的に多様な韓国社会の現在と未来を描写するものとなる（ソウル国際女性映画祭2012年、2013年プログラム）。作品は、「文化」の複数性を賛美するような、韓国社会に一般的なアプローチではなく、韓国という「多文化」社会に生きるとはどういうことを思考し、批判的に検証し、問題提起するも

のが多い。

3. 移住女性による主体的な映像制作

多文化メディア・アカデミーの目的は、移住女性の体験、抱えている問題をフェミニズムの視点から、映像を用いて韓国社会に投げかけることである。近年制作された短編をいくつか見てみよう。

「移住女性の在留 安全な在留＝安全な生活」(ルティマイトゥ監督、2011年)は、ベトナム出身の監督が、自分の体験に即し、結婚移住女性の不安定な法的地位について問題提起をする。20代なかばのルティマイトゥは、韓国に移住して7年たつ。韓国語をマスターし、生活上の支障もなく夫婦関係も良い。しかし夫とけんかをすると、「もし夫が配偶者ビザの延長を拒んだら？」と不安になる。滞在資格の延長を申請する際は、原則として韓国人配偶者による身分保証が必要だからである。韓国での生活にすっかりなじんだように思っていたが、自分の立場のむろさに気づいた彼女は、「夫だけが頼り」という生活を変えようと思いつく。まず永住権を獲得。しかし外国人に課される旅券の常時携帯、インターネット利用の制限は変わらないままである。このためルティマイトゥは韓国籍を申請した。しかし、なぜかなかなか許可がおりない。入国管理局の職員には、韓国人の夫との間に子どもがいらないからだと言われる。韓国に6年住み永住者でありながら、子どもの有無で差別されるとは。アップに写された韓国語能力試験上級合格証明書に、彼女の憤りの声が重なる。

映画「マイラティマ」でも描かれていたように、結婚移住女性が韓国で滞在期間を延長する際、そして永住権や国籍取得の際は、韓国人配偶者の身元保証が前提となるのである(韓国人配偶者の家出や暴力等、移住女性に帰責時由がない婚姻破綻、あるいは韓国人の子どもを養育している場合等を除く)。偽装結婚を防止する趣旨だが、この規定は、韓国人夫の外国人妻に対する優位性を作りだし、すべての国際結婚カップルに関わる問題である。不平等な関係性は、韓国人夫や親による外国人妻の虐待や暴力の温床である。移住女性の人権団体スタッフであるルティマイトゥは、政府を批判するだけでな

く、実例を示しながら当事者が声を上げていく必要を感じて製作した(2012年4月22日インタビュー)。

映画の中の彼女は、マジョリティから受け入れられるよう期待された役割を演じる、作られた〈結婚移住女性〉ではない。等身大の姿、生の体験を描いているからこそ、法制度に対する彼女の抗議は説得的である。

「希望」(ヤン・リョファ、オム・ミラン監督、2011年)は、韓国人夫によるベトナム人妻殺害事件に触発された作品である。被害者の追悼会、被害者の遺影や傷の写真を掲げてデモをする人々の場面に、移住女性支援組織で活動するオム・ミランのナレーションが重なる。「信じていた夫に殴られ殺される。移民としてより女性として心が痛む」。別の移住女性はインタビューで「自分も同じ目にあつたらと思うと怖い。夫を頼りにするしかないのに、裏切られたら誰を信じればいいのか」と訴える。外部との連絡を禁じられ、逃げられないよう監禁された妻の話。重苦しい画面から、結婚移住女性たちの声にならない恐怖が伝わる。移住女性支援組織で活動する韓国人男性が登場し、結婚のために韓国に渡ってきた妻に対する夫の責任を強調する。場面が切り替わり、監督らが関わっている移住女性の集まりの様子が描かれる。韓国語学習、旅行、子どもへの出身国文化の教育。移住女性たちは、同じ立場の者同士で助け合い、心の支えにしてきた。さらに、結婚移住女性支援団体で活動する、韓国人夫たちのサークルが紹介される。タイトルの「希望」は、これ以上移住女性の犠牲者を生み出さない、幸せな社会に向けた願いである。最後に、妻が活動に熱心なことに不満を持つ韓国人夫らが、愚痴をサカナに酒を飲む場面にかぶせるように、「わかってくれて、信じてくれる夫よ、ありがとう」というテキストが流れる。

前半で示される、女性に対する暴力という「暗部」と、後半における、移住女性とその家族が作りだすコミュニティの明るさが対照的である。オムは、DV被害は深刻だが、結婚移住女性についての悲惨なイメージを壊したい、ともに楽しく生きていく者として見てほしい、と語る(2012年3月14日インタビュー)。さまざまな国籍や民族的背景、ジェンダー、世代が有機

的につながる、多元的で開放的なコミュニティは、彼女が願う未来の韓国社会の姿であろう。

上にあげた2本は、在留資格やDVに焦点をあて、男性中心的な法制度、韓国社会を直接的に批判するものである。韓国のフェミニズム運動の視点が反映され、女性間の連帯を表わす作品ともいえよう。

「聞きたくなくても最後まで聞かなければいけない歌」(カン・ホギュ、レイゼル・ビラランダ、ファン・ヨンジュ監督、2012年)は、フィリピン出身の結婚移住女性ビラランダのストーリーを、K-POPの替え歌で表現したミュージックビデオである。自宅で料理やトイレ掃除をしている導入部で、ビラランダはお玉や掃除ブラシを振りながら、「私の歌をちゃんと聞いて」と訴える。渡韓後すぐに妊娠したビラランダは、韓国語も文化も、出産のこともわからない。夫に不安を訴えるが「心配すんな、俺がいるじゃないか」と取り合わない。ホームシックになり、フィリピンマーケットでバロット(孵化前のアヒルの卵をゆでたフィリピンの食べ物)を買うが、夫に捨てられてしまう。「食べたいもの、着たいものはなんでも買ってやる」という夫は口先だけで信用できない。

娘が生まれ、味方ができたと喜ぶビラランダ。だが、娘が成長するにつれて溝が生じていく。授業参観に行こうと服を新調した母に、娘は「来ないで」と冷たい。母親が外国人だから、韓国語ができないから学校に恥ずかしくて来てほしくないのか?娘にまでそっぽをむかれて取り乱す。自信がないせいで過剰反応していると夫に言われ、混乱はより深まる。だが娘の日記を盗み見て、母親が太りすぎという悪口を発見。娘のために、フラフープや縄跳びをしながらダイエットに励む。彼女を見守る夫と娘。家族に対し、ありがとうという言葉が重なる。家庭生活に奮闘する姿が中心だが、洋品店で服を見ているビラランダに、「それはあなたには高すぎるから(買えないでしょう)」と店員に言われる場面がある。「肌の色が濃い」人に対する典型的な人種差別である。

ビラランダのユーモラスな演技が光る作品である。しかし「私は外国人。一人ぼっちでどんなに寂しいかわかってない。本当の私をわかってない」というリフレイン。コミカルに踊りな

がらも表情は沈んでいる。在韓歴14年で子育て中のビラランダは、「ごく普通の」結婚移住女性の気持ちを表現したかったという(2013年5月25日インタビュー)。家事育児に奮闘し、ときには夫婦喧嘩をしながら、アイデンティティに悩む日常生活は、韓国人主婦にも共通するように見える。しかし、ビラランダの不安や孤独は、異邦人として、そして人種差別に日常的にさらされながら韓国に生きることに直結している。移住女性と「先住民」女性の双方に課された再生産労働という共通部分と、韓国社会内で可視的マイノリティであるという差異をどう意識化し、どのように向き合うか、見る側に問われている。

4. IWFFISが創りだす「女性場」と移住女性

韓国社会の中で「多文化」は言葉としてすでに定着し、また移住女性による公共空間での活発な活動が増えている。しかし現状では、移住女性が当事者として韓国社会をどのように考え、またなにを欲しているかを率直に語ることが可能な空間はほとんどない。そうした中、IWFFISはビデオ・アクティビズムにより、移住女性が客体としてではなく主体として自己を表現できる空間を提供し、韓国社会の〈多文化〉の現状に対し問題提起することを可能にした。

この試みは、IWFFISによるそれ以前の取り組み、すなわち女性監督作品を集めて上映するだけでなく、討論を通じてフェミニズムの視点による女性が置かれた状況の問題化を促す「対抗的な公共圏」の延長線上にある。IWFFISは設立以来、「女性たちが出会い、活性化し、ネットワークを拡げ、女性の課題に集中する対抗的な公共空間を創りだしてきた」(クォン・ウォンスン、前掲論文)。IWFFISが他の映画祭と異なる重要な点は、女性たちのあらたなコミュニケーションの場、公共的な場、つまり「女性場」を提供し、追究してきたことである。そこでは、〈映画〉と〈女性〉というふたつの「現場」が化学作用を起こし、あらたな思考が生み出される(キム・ウンシル「女性場としてのソウル国際女性映画祭」『第10回ソウル国際女性映画祭記念白書』2008年)。フェミニスト研究者としてIWFFISに設立当初から関わるキム・ウンシル

は、IWFFISという国際的な女性映画祭に参加することを、空間と多様な差異を越えて自己のアイデンティティを拡張し、異なる社会に属する女性たちとの連帯を体験することと表現する。こうした異なる女性たちとの連帯による「女性場」がすでに用意されていたこと。そして「先住民」女性からの呼びかけがあったからこそ、活動の場を拡げたいと考えていた移住女性たちがIWFFISという「女性場」に参加し、主体的な表現活動が可能になったといえよう。

多文化ビデオ・アカデミーで作りだされる短編は、移住女性の体験をフェミニズムの視点から再解釈し、意味づける。ドキュメンタリー、ドラマ、ミュージックビデオなどさまざまな形で、移住女性は家族や子どもの学校、地域で感じる違和感を表現し、日常生活の中で偏見や差別が生み出される瞬間をたくみに再現して見せる。作品で扱われるテーマの多様性や独自の解釈は、韓国社会の家父長制に対し、ともに闘うパートナーという位置づけ、あるいはそのような「先住民」女性からの期待さえ超えて、移住女性がそれ自体ユニークな存在であることを知らしめる。なおIWFFIS主催の多文化映像祭(2013年11月24日)では、ソウルの工業団地を拠点とする韓国人主婦グループが制作した短編が上映された。それら「先住民」女性が制作した作品の中には、カンボジア出身女性との交流で感じる苛立ちや、偏見にとらわれた自身の姿が率直に描かれる。「先住民」女性が、どのようにして自分の内面を直視し、「多文化」の傍観者ではなく「当事者」として捉えることができるか、さらなる展開が期待される。

社会におけるさまざまな境界をめぐるポリティクスを、移住女性、韓国人女性や男性などがそれぞれの立場から見えたものとして切り取り、提示する。そのことであらたなコミュニケーションが生まれ、これまでとは異なる関係性が創られていく。韓国社会に対する批判を、マジョリティは聞きたくなくても聞かなければならない。多文化メディア・アカデミーの試みは、いまのところマスメディアが作りだす結婚移住女性の表象に対抗するささやかな試みにすぎない。しかしそれは、マジョリティの側が移住女性に対して特定の役割を演じるよう期待し、存在そのものを支配するような、既存の

「多文化」プロジェクトにおける構図とは異なる、移住女性が主体的に創りだす「多文化」の形といえよう。

付記：本稿は文科省科学研究費補助金（基盤研究C）の成果の一部である。